

りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館

公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

事業企画部演劇企画課

小野塚 陽

2021年12月のシンポジウムから半月後、新型コロナウイルスの新たな変異株「オミクロン株」の流行が始まり、それ以前とは比較にならない感染者数が連日報道されました。私が勤務するりゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館がある新潟市を含めて、新潟は全県的に医師の人数が不足しています。医療体制が磐石とは言えない地方都市では、新型コロナウイルスの感染拡大による医療逼迫は容易く起こり得る事態であり、コロナ関連の報道はひたすら市民の不安を煽りました。ちょうど、1年の中で最も寒く天気の悪い時期を迎えており、年明けすぐに新潟県独自の警報発令、やや間を置いて蔓延防止等重点措置が適用されたため、公演への来場者は目に見えて減りました。シンポジウムの中では、コロナ禍における劇場の課題のひとつとして「券売・集客率の低迷」を挙げましたが、オミクロン株の流行が数字の悪化に大きく影響したことは言うまでもありません。

丸2年以上に渡って感染の拡大期と減少期を繰り返してきましたが、「コロナ禍が終息してもコロナ前とまったく同じ状態には戻れないだろう」と漠然と描いていた未来図が、徐々に現実のものになり始めているように感じます。コロナ前であれば券売実績が好調だったのであろう公演でも、現在は感染状況の沈静化が一時的なものではない、と安心できるまで券売の週報数字がほとんど動きません。感染拡大期には感染者数に反比例して券売数や来場者数が減少傾向へ即座に転じるのに対し、感染減少期へ移行し始めた段階ではそれぞれの数字は停滞したまま動かないことから、お客様1人1人がチケットの購入や劇場へ足を運ぶことに非常に慎重になっていることが窺えます。一度劇場から遠ざかってしまった人々が再び劇場へ戻って来るために必要なものは何か、そもそも、以前のようにまた劇場へ足を運ぶようになるのかもわからず、具体的な解決策を講じるにはどのような理由で劇場から遠ざかったのかを調べる必要があると思われまます。

このような現状を把握しつつも、日々の業務の中で券売や集客率の回復をどのように図るか有効な手立てをいまだ見出せてはいないのですが、ひとつの事例として、りゅーとぴあのジュニア育成事業の実績の一部を振り返りました。現状を打破するためのささやかなヒントになればと個人的には考えていますが、私自身も担当として携わっている事業でありごく身近な事例であること、公演事業とは異なり担当者が日常的に、参加する子どもとその

保護者などと接する事業であることを、予め申し添えておきます。

ここで言うジュニア育成事業とは、りゅーとぴあが主催する小学生から高校生までのジュニア世代を対象とした4つの団体「ジュニアオーケストラ」「ジュニア合唱団」「ジュニア邦楽合奏教室」「演劇スタジオ キッズコース APRICOT」を指します。活動日数や時間、内容はそれぞれの団体によって異なりますが、「年間を通して活動」「初心者から入団を受け入れる」という二つの共通した特徴を持っています。

このジュニア育成事業について、りゅーとぴあが定めた運営目標の中に「4団体の合計参加者人数 300人以上/年」という数値指標があります。実はこの数値指標、コロナ禍に陥った2020年度以降も毎年達成しており、団体によっては過去最多の参加人数を数えています。活動自体はコロナ禍の影響で長期間の休止や人数・時間制限付きでの活動を余儀なくされており、平時とはくらべものにならないほど活動規模が縮小しています。参考までに、2020年3月以降のジュニア4団体の活動実績を表に示します。

表 2020年3月以降のジュニア4団体の活動実績

ジュニア 育成事業	2020 (R2) 年度 ※2020年3月含む		2021 (R3) 年度	
	公演実績 (年2回)	活動休止期間	公演実績 (年2回)	活動休止期間
邦楽合奏	夏：関係者のみ公開 春：制限付き開催	3～6月初旬 (3ヶ月)	夏：開催 春：中止	8～11月下旬 2022年1～3月初旬 (計5ヶ月)
合唱団	夏：中止 春：制限付き開催	3～8月末 (6ヶ月)	夏：中止 春：中止	8～12月下旬 2022年1～3月末 (計7ヶ月)
オーケストラ	夏：制限付き開催 春：制限付き開催	3～6月初旬 (3ヶ月)	夏：中止 春：中止	8～11月下旬 2022年1～3月初旬 (計5ヶ月)
APRICOT	夏：関係者のみ公開 春：制限付き開催	3～6月下旬 (3.5ヶ月)	夏：開催 春：中止	8～12月初旬 2022年1～3月中旬 (計6.5ヶ月)

この育成事業はジュニア世代を対象とした通年開催の事業であり、感染拡大初期に実施された全国一斉休校(2020年2月末、政府要請)の際には、所管地域の教育委員会の方針に従うなど、コロナ禍の影響を特に強く受けてきた事業でもあります。表にもあるとおり、4団体ともに中・長期に渡る活動休止や、夏と春に毎年開催している本番公演の中止等が相次ぎ、活動再開後も会場規模や人数・活動時間の縮小など、厳しい制限下での活動を強いら

れてきました。また大変残念なことに、2021年8月、ジュニア合唱団において、団員、スタッフ、団員の家族にまで及んだ大規模な集団感染が発生し、市民からクレームや問い合わせが多く寄せられました。この集団感染は、参加していた子どもとその保護者、さらにはこれから入団を検討していた参加希望者にとって非常にネガティブな経験となってしまったであろうことは否定出来ません。

それでもこのジュニア育成事業の参加人数が減らなかったのは何故か。考えられる理由のひとつに、自らが所属する団体への愛着、一緒に活動してきた団員同士の関係性があります。それらに重ね、「活動への参加を続ける」という判断を後押ししたのは、劇場側が日々積み重ねてきた地道な感染対策を受益者にも目に見える形で折に触れ提示してきたことが大きく影響していると思われます。これは特に団員の保護者にとって、活動へ参加する際の安心材料として受け止められています。また、ジュニア合唱団の集団感染がある程度落ち着いた後に徹底的な事実検証を行い「検証報告書 [JCreport 20211001 All.pdf\(ryutopia.or.jp\)](https://ryutopia.or.jp/jcreport/20211001_all.pdf)」を作成・公開し説明の場を設けたこと、りゅーとぴあにとってマイナスになる情報も包み隠さず公表したことにより、結果的に信頼の回復と評価につながったことが、参加者のみなさんと日常的に接する中での何気ない会話や言葉の端々などからも窺えました。

このジュニア育成事業の事例から、活動への参加とコロナ不安による活動自粛とを天秤に掛けて前者へ傾いた理由に、劇場（＝直接の事業担当者）への信頼あるいは安心感があつたのでは、と個人的には考えています。数字に表れるデータがなく確実な裏付けを取るにも情報が足りないため、現時点では「こういうことがあった」という認識に留めておき、これが劇場にとって都合の良い解釈へと歪められないように注意しつつ、今後は、ひとつの仮説としてもう少し調べてみたいと思います。もしこの仮説が実際に成立するのであれば、今後の集客率回復の手立てに「感染対策の徹底による安心感の提供」を掲げることも可能になるかもしれません。

新型コロナウイルスとの闘いは早くも3年目に突入しましたが、いわゆる「終息宣言」はどこからも出されておらず、過去2年間の経験からコロナ対応はもうしばらく必要とされるだろうと誰もが予測しています。「アフターコロナ」という言葉が、「終息宣言」が出された後あるいはインフルエンザのように特効薬が開発され過不足なく供給された後のことを指すのなら、現在は「アフターコロナ」に向けた緩やかな過渡期に位置付けられるのではないのでしょうか。ウイルスの根絶は現実的に不可能であり、100%リスクを排除できる感染対策もないとされている現在、業務を圧迫するばかりとっていた地道な感染対策や消毒作業を丁寧に繰り返すことこそが、「あの劇場なら感染対策がしっかりしているから大丈夫」という安心感を与えるのに最良の方法ではないか、とシンポジウム後に考えを改めたところです。今は焦らず、確実に出来ることを積み重ねるべき時期と考え、コロナ禍3年目こそは大過なく乗り越えられるように努めたいと思っております。